

けたハツカン氏は「また約束を忘れて図書館で一生懸命読み耽つてゐるのだよ」と囁いた。「また」といふから、度々そんなことがあるのかと聞くと、「珍しいことではない」といふ。どこの國の學者も大概同じ型だと思はずほゝ笑まざるを得なかつた。暫くすると大急ぎの足取で馳せつけたのが、赭い顔をハンカチで拭きながら「遅くなつた、遅くなつた」と繰返しながら歸つて來られた博士であつた。一寸きまり悪いやうな眼を令夫人の方に向けられただけで、早速誰彼と例の特徴ある鏘聲で話を始められた。きつと遅くなつた理由のいひわけをせられたのであつたらうが、それがどういふ事であつたかは今自分には記憶がない。この日更に他の人に逢ふ約束のあつた自分は目的の紹介状を貰ふと一同に先立つて辭去した。この紹介状は羅馬で大に役立つて、そこに滞在の一夕をフォルミキ教授の宅に招かれ、食後ファイスト氏の印度日耳曼文化發達史に關する氏の率直な意見を聞いたり、音樂家である令妹の獨唱する妙曲を聞いたりすることを得た。

その後我が國に來遊せられた大正十二年、昭和二年の兩度とも度々京都で逢ひ、いつも生き活きた健康色を漲して居られるのを慶賀したのであつた。

梵語學者として名聲を擧げられた博士が、この三十年ばかりの間、更に龜茲語の研究に精進せられ、中亞に於ける印歐語の祕密の幕を捲き上げるのに大功を立てられたことは、凡そ言語の學や東方の學問研究に従事する誰もが知ることである。大正十一年には東西の兩大學で、昭和二年には東大でこれに關する特別の講義が開かれ、また諸種の會合に於ても屢々これに論及せられたことは我が國の東方學術發達史上にも特筆せらるべきことで、近時東京の福島氏を始め、漸く擡頭の勢を示して居るこの方面の研究は、博士の此等の講義や指導に負ふところ多いのは言ふ